

階で入院先の自宅に帰って来ていました。新型コロナウイルス禍で病院で面会できていなかった彼の母が会いに来てくれ

認知症の家族を怒らないで

歌手の今陽子さん



●母の93歳の誕生日を知り今陽子さん(右)

●「認知症の人の声をしなば明かならぬ」と語る吉田勝院長



このように「父は当事者の家庭でありながら、吉田院長は認知症の人に怒りを感じてはいけない」と

「90歳になった遠端に椅子に座ったきり、笑顔がルとして「恋の季節」を夫にまこともあつたときなくなった。言葉数も少なくなり、別人のようになり、だが、意識的に接し方を委ねたことで良好な関係を取り戻せたという。今(95)の様子に変化が始められてきたり、89歳になるまで確定申告を引き受けてくれたり、89歳になるまで確定申告を引き受けてくれたりもした。今(95)は19歳でロッキン院(横浜市)の吉田勝院長(66)に聞いた。

認知症の家族に同じことを聞かれたり、伝えたいことを言われてしまったりして、イヤとした経験がある人は少なくないだろう。5年ほど前から認知症の母の介護に取り組み歌手今陽子さん(70)もそんな一人だ。

の参りについて相談し、その施設の職員に付き添われて会場に到着した母は、喪服姿の人々に事象を察したのでしょうか。何だ、それが私の生きる希望になっていきます。認知症の人と家族の会事務局員、佐賀市生まれ

指摘する。「昨日何を食ったか忘れても、「楽しいか」「つまらなかつたか」といった感情は残っている。叱られ、言い訳するために作り話をすることもある」

「90歳も言ったでしよ」と言うのと、「さっきから何回聞いたかな」といって、人の会話は憶やかにいって、やがてちぐはぐな会話をコントのようなものとして楽しめるようになり、2人母と接するようになっていく。

「た、こうした関係を続けるには、介護をする側の心ゆとりが必要になると吉田院長。今(95)もケアの日を含め、母にケアサービスを利用してもらうようにしている。吉田院長は「家族だけの介護は限界がある。地域で見守りがキープトとドライブする。今(95)は母「認知症の母が劇的回復を遂げるまで」(IP出版)に介護の経験についてついで

愛知の病理医・堤さん 病理標本ネット公開を計画

精神疾患を除き、病気の診断で基本となるのは「病理診断」だ。臨床医が患者の体から採取した組織や細胞を使い、臨床検査技師が病理標本を作る。それを病理医が顕微鏡で観察し、どのような病気なのかを判断する。

「ネットワークで公開するプロジェクトを計画。必要な資金1500万円を11月6日までクラウドファンディング(CF)で募っている。堤さんは自宅に併設したクリニックに1万症例余りの標本を保管する。これらの写真を使い病理学の教科書を出版してきたい。病理専門医を目指す医師が標本を見られるため訪れることあるという。

「教科書では、見える範囲にも症例数にも限界がある。ネット

「ネットワーク」＝電話0587(96) 7088、電子メールpathos223@kind.ocn.ne.jp、CFの情報はこちら<https://readyfor.jp/projects/103977>



自宅に併設したクリニックで病理標本を保管する堤さん(愛知県稲沢市)

節約生活といえは、「苦しい」というインジケーションが、お金を無駄にしないよう、著者は健康が保たれることができれば、住まい、調理やおしゃれ、住まい、鍋料理の残りに使うラップ、ラップ素材のラップ紙でラップして。ちよつとしたラップが豊かになることが望

シニア

紙面編集・藤生雄一郎

おめでと健康 佐賀県女性が

マイポポが

この不慮、す。僕、たり、す。僕、たり、す。僕、

健康を大切にしよう